平成２７年度終わり良ければすべて良し

平成２８年３月末

教頭便り

茨城県立鬼怒商業高等学校　教頭　宇都木　直之

平成２７年度が終わった。

第97回 全国高校野球 茨城大会

鬼怒商 快進撃

38年ぶり8度

2死から着実加点

連球攻略できず零敗

思えば昨年度は，夏休みまでは一日一日じっくりと地に足をつけて着実に歩んできた感があった。１年生の共同宿泊学習，クラスマッチ，検定試験への取り組み，部活動，特に野球部の３８年ぶりの県大会ベスト８進出では，選手・応援団員そして一般生徒も教職員も，学校全体が燃え上がっていた。

しかしその流れは９月１０日（木）の大雨・鬼怒川増水・田川逆流による校舎水没によって一変した。２メートルにも及ぶ泥水が本館・特別棟・実習棟・体育館・武道場を覆い尽くした。田川の水は波を打ち，いつもは５メートルは上にある田川橋の橋げたを，ボコッボコッと音を立てて突き崩そうとしていた。ふと橋の欄干に目をやると，そこには信じられないような光景があった。あんなものを私は初めて見た。普段は草むらに身をひそめ，暗闇の中でしか姿を現さないような大きなムカデが，何匹も何匹も整然と列をなしているではないか。ムカデだけではない。バッタやカマキリ，ゴキブリやカエルなど，一緒にいれば食い食われる関係にあるような生き物がみな橋の上に仲良く避難しているのである。じっと見つめていると何か長いものが動いた。最後はヘビだ。橋げたの下から頭をもたげて姿を現すと，欄干から身を乗り出し私には見向きもせずに，呆然とどす黒い川の流れに見入っていた。その後ろ姿はどこか不安げで，自分の当時の心境と相通じるものがあり，親近感さえ感じた時には思わず笑ってしまった。

生徒・職員総出で片づけを行い，２週間後には学校を再開することができた。体育館が使えないため部活動はジプシーのように施設を渡り歩いた。そんな中，元巨人軍の仁志選手から復興支援として野球道具をいただいたことはこの上ない感激だった。

鬼怒商／石下紫峰／水海道二／水海道一

被災4校に野球道具

仁志敏久さんが寄贈

そして迎えた３月１日は火曜日。本校体育館は現在も工事が続いており，卒業式の会場探しに校長先生は旧年中から奔走されていた。そして結城市職員の皆さんのご厚意で，定休日にもかかわらずアクロスを開けていただき，卒業式を無事行うことができた。有難いことである。復興でお世話になった全国の方々に感謝の意を込めて，こんなことくらいではびくともしない，たくましく成長した自分たちの姿を地域の方々に見ていただこう，そんな卒業式にするために全員で力を合わせようと訴えた。厳かな会場内に生徒一人一人に対しての担任からの魂の呼名・心の通った力いっぱいの返事が響き渡り，答辞を述べた元生徒会長の目は涙であふれていた。来賓の方が言葉の一つ一つにうなずきながら聞き入っておられた姿には，生徒たちを慈しんでくださっているのだと感じてうれしかった。こんなによくできた真心のこもった卒業式は教員人生始まって以来だ。

学びや巣立ちの日

卒業生代表のトー・ゴック・ホン・トランさん（左）が答辞＝結城市中央町2丁目

「自信持ち進んで」

鬼怒商

校舎などが浸水被害に遭った県立鬼怒商高の卒業式は1日、結城市中央町2丁目の市民文化センターアクロスで開かれ、169人が式典に臨んだ。同校体育館が復旧工事で使用できず、別会場での開催となった。

式辞の中で福田洋治校長は「これから目指す社会は過酷な世界。だが限りなく可能性を伸ばせる場でもある。学校で鍛えられた『個』を発揮し、自信を持って突き進んでほしい」とエールを送った。

卒業生代表のトー・ゴック・ホン・トランさんは「先輩や保護者、地域からたくさんの支援を頂いた。多くの人の愛情に包まれて3年間を過ごしてきたのだと実感した。忘れられない思い出になった」と答辞を述べた。

この日は、県内の大半となる高校計108校などで卒業式が行われた。（小池忠臣、溝口正則、小原琢平）

こんな幸せな気持ちになったことがあったろうか。この仕事に就いて良かったと心から思った。